20029

冠動脈 CT 検査における冠動脈有意狭窄病変に対する診断能の検討

[目的]冠動脈 CT 検査(C-CTA)における冠動脈有意狭窄病変に対する診断能について検討する事。[方法]対象は 2014.1 月～2014.9 月の間に C-CTA を施行し、C-CTA で有意狭窄あり(狭窄率 51%以上)と診断され、かつ 2 か月以内に冠動脈造影(CAG)を施行した 42 症例(有意狭窄病変:132 箇所)。これらの病変において C-CTA と CAG での狭窄率を比較し、有意狭窄病変における C-CTA の診断能について検討する。また狭窄率に差を認めた病変においては、その原因についても検討を行い、C-CTA の診断時の注意事項についても考察する。[結果]3 割程度の病変で C-CTA と CAG で狭窄率に差を認めた。C-CTA と CAG では狭窄率の測定方法が異なるため、血管壁がリモデリングしておりかつ血管内腔がある程度確保されているような病変では、C-CTA の方が CAG よりも狭窄率が大きくなる傾向にあった。逆に中程度以上の石灰を含む病変では、CAG の方が C-CTA よりも狭窄率が大きくなる傾向にあった。また有意狭窄病変を複数箇所で認める症例においては、C-CTA 診断時に全ての病変を指摘出来ていない症例もあり(13 病変)、それは右冠動脈や回旋枝の末梢など AX 断面に対して並行に走行している血管で高い傾向にあった。